

健康日本 21(第2次)の柱である 健康格差対策に 悩んでいる方へ お勧めの1冊

評者◎尾島俊之

浜松医科大学健康社会医学講座

健康格差対策の進め方

効果をもたらす5つの視点

近藤尚己(著)

本体 2500 円 + 税 / 医学書院 (Tel : 03-3817-5657)



「健康格差」という言葉は、健康日本 21(第2次)に記載されてから、公衆衛生の現場でも普通に使われるようになりました。しかし、実際に自分のところで健康格差対策をしようと思った場合に、何をすればよいのかを悩んでいる方は多いことと思います。また、特定健診や特定保健指導の案内を出しても来てくれない無関心層に対して、どのようにアプローチすればよいのだろうかと困っている方も多いでしょう。そのような現場のみなさんにぴったりの本が出版されました。

著者も書いていますように、最初の 37 頁までの第 1 章に全体の概要が書かれていますので、忙しい方は、それを読むだけでも大枠が理解できます。要所要所に〈ポイント〉がまとめられ、また図表も多く、斜め読みもしやすくなっています。

続く第 2 章では、健康格差対策の「5つの視点」について、理論的にしっかりと整理されています。その中には、「モノを売る」理論、「カッコイイ」ブランド戦略、人々が夢中になるゲームにはどのような要素が含まれているかなど、目から鱗の視点が目白押しです。

さらに素晴らしいのは、実際の事例がたくさん紹介されていることです。「見える化したデータで部署間をつなぐ地域包括ケア会議」などの熊本県御船町、「住んでいけば自然と野菜摂取が増えるまちづ

くり」などの東京都足立区での取り組みは、著者自身が関わって進められてきた取り組みでもあり、詳しく記載されています。

私の地元の静岡県からは、掛川市でのワンストップ型の地域健康医療支援センター「ふくしあ」、藤枝市の「バーチャル東海道の旅」、三島市での「健康行動をとりたくなるインセンティブの例」などを紹介しています。海外の事例にも将来の取り組みの参考になるものが多数あります。自分の地域の状況やマンパワーに応じて、取り組みそうなことを選んで検討してみるとよいでしょう。

この本は、「業務がラクになる!」ことをめざしているのも特徴的です。「見える化」を進めることによって、優先すべきグループや課題が整理されて、ゆとりが生まれることが期待されます。

第 3 章は健康格差の評価方法で、長年著者が取り組んできたテーマでもあります。このあたりは、ちょっと難しいところもあり、実際にきちんと評価をしてみようと思った場合には、研究者に相談しながら進めるのもよいのではないかと考えられます。

全体として、本書は健康格差対策の全体を学ぼうと思ったときの教科書として、また、ある自治体において実践しようと思ったときの手引きとして、とても活用できる本と言えるでしょう。